

伊豫簾。

年をへて世にす、けたるいやすだれ懸さげられて身をばすて、き

光俊

蕪者草簾也、編草障戸者、今垂繩、名繩、簾者是也。

〔伊呂波字類抄雜物〕御簾ニス。

〔下學集下財〕翠簾日本俗或作。

〔易林本節用集器財〕御簾翠簾。

〔倭訓栞前編三十〕みす 簾をいふ御簾の義也、或は翠簾をよめり、おほひみすといふ物、まさすけ

に見えたり、みすまさあげと源氏權に見えたるは、香爐峰雪撥簾看といふ意也といへり。

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕鈎簾翠廉 俗云古須 今云美須 共和訓之下略也 簾之鈎 俗云古末利

按鈎簾極細籤竹簾也、其縁以綾純子縫包之、有眞紅絲總帶ハシヒ有鈎、以揭卷簾、其簾青翠色、故名翠簾、宮

殿神前用之、京師有家神前鈎簾掛於棚外、尋常掛於棚内、

〔類聚名物考調度五〕鈎簾 こそす 小簾

おもふに後世のものに、これをこそすと訓り、鈎簾音訓相交へたる事、尤そのことわりなし、思ふに

鈎は加末と訓べし、すだれをつり上る時かけ置時のかま也、唐の書に鈎と鎌とは同じくかよへ

り、加末をかうとのべたるは、古とのみつゝめていへるにまがへるならん、

〔空穂物語藏開中〕三條殿のかくて源中納言殿のうぶやの七日のよになりぬれば、きのかみにお

ほみあるじのことゝもをおとこかた女方おまし所、去つらふことつかうまつる、みすにはあさ

ぎにして、みどりのきをはしにはさしたり、南のひさしにめぐりてかけたり、

〔枕草子四〕ありがたきもの

みすのいとあをくおかしげなるに、きちやうのかたびらいとあざやかに、すそのつますこしう